北海道支部

1.

中途退学者の追憶と今の仕事のこと

47H　滝川康治
下川町在住

和光大学に入学してから、ちょうど50年になる。北海道の戦後開拓農家に生まれ育ち、地元の農業高校を卒業。「実験大学」の志に惹かれ、1972年に推薦枠で入学した。

最近、卒業生の松永洋介さんのホームページ「梅根悟『小さな実験大学』」を見つけた。私たち72年度新入生に対する学長講話は「大学は建物でなく教師である」。梅根学長は、在学中に進むべき道を見つけた学生の中から、「中途退学者が続々と出て来ることを、実は期待している」とも語った。期せずして、私もそんな道を選んでしまう…。

のちに学長も務めた三橋修さん（故人）のコアクラスを選び、「開発公害論」の受講をきっかけに生越忠さん（同）の研究室によく出入り。人間関係学科では、公害問題や大学論、精神医療、民族差別問題などの自主ゼミが次々に生まれ、私は一般の授業より力が入った。

学費値上げ反対運動（74年）が起き、自主ゼミ連合の発足にも関与。カリキュラム討論集会が開かれ、議長を務めたことも。昔の資料の中に「人間科学論試論」という教員会議の文書を見つけた。学生・教員とも、真摯に議論を交わす時代だった。

75年秋に退学届を出したが、"ニセ学生歓迎"の校風に甘え、2年間ほど複数の講義に通う。いくつかの仕事をしながら、川崎などでの公害反対運動に関わった。

10年間で首都圏の生活にピリオドを打って帰郷。ローカル紙の記者になり、家業の酪農を営んだ時期もある。80年代末、恩師の三橋さんが「君の牧場を見たかった」と来訪。実家からジャガイモを送り、大学構内で栽培したことを覚えておられ、「君は"和光農業大学"の初代学長だよ」と言われ、うれしかった。

北海道北部の幌延町で起きた、高レベル放射性廃棄物（核のゴミ）施設の立地をめぐる反対運動に参加し、記録書も出版。91年からフリーのルポライターになり、現在に至る。近年は、道南の寿都町と神恵内村で核ゴミ処分場の選定に向けた事前調査が始まり、関連取材は続く。

「農と食」も私のライフワーク。ようやく認知されるようになった、アニマルウェルフェア（動物福祉）の市民講座も継続中だ。"和光農業大学"の学長らしい生き方か…（笑）。

※拙文の一端はHP「滝川康治の見聞録」に掲載しています。
https://takikawa-essay.com/

自主ゼミ「大学論」の合宿
（74年8月、青部セミナーハウス）

篠原孝農林水産副大臣（当時）に
インタビュー（2011年1月）

滝川　康治　プロフィール
（by田畑博）

山あいの山村で暮らし、北海道を舞台に取材活動を続ける一方、核のゴミや動物福祉をめぐる市民活動にも参加している。

著書：『核に揺れる北の大地』
『狂牛病を追う』ほか